

I期原発性非小細胞肺癌における微小リンパ節転移検出の意義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/15438

学位授与番号	医博甲第1331号		
学位授与年月日	平成10年11月30日		
氏名	野澤寛		
学位論文題目	I期原発性非小細胞肺癌における微小リンパ節転移検出の意義		
論文審査委員	主査	教授	渡邊洋宇
	副査	教授	三輪晃一
		教授	磨伊正義

内容の要旨及び審査の結果の要旨

肺癌の治療は外科的切除が中心であるが、I期切除例においても5年生存率は65～75%と不良である。近年、従来の病理診断では検出できない骨髄や、リンパ節中の微小転移巣の検出が着目され、種々の臓器の癌において検討されている。本研究は、長期予後の判明しているI期原発性非小細胞肺癌治療切除例132例を対象とし、抗サイトケラチン抗体を用いた免疫組織化学染色法により微小リンパ節転移の検出を行い、臨床病理学的諸因子および予後との関連を検討した。得られた成績は以下のごとく要約される。

1. 微小リンパ節転移の検出には、抗サイトケラチン抗体としてCK18とAE1/AE3による免疫組織化学染色法を用いた。両抗体の染色性の比較を行った結果、後者が微小リンパ節転移の検出に有用であった。
2. I期原発性非小細胞肺癌治療切除例132例中36例(27.3%)に微小リンパ節転移が検出された。微小リンパ節転移の陽性率は年齢、性別、分化度、原発部位および腫瘍径との相関性を認めなかった。
3. 原発巣の腫瘍径の増大に伴い原発巣におけるリンパ管侵襲の陽性率は高くなる傾向があった。また、原発巣におけるリンパ管侵襲陽性例は陰性例に比べて微小リンパ節転移の頻度が高くなる傾向があった。
4. 上葉原発および左下葉原発症例では領域リンパ節への微小リンパ節転移が高頻度にみられたが、右下葉原発症例では非領域リンパ節への転移が比較的高頻度にみられた。
5. 微小リンパ節転移陽性例は転移陰性例に比し有意に予後不良であり、訂正病期分類の結果、I期例に比べて、II期およびIII A期の予後は有意に不良であった。

以上の結果から、病理病期I期原発性非小細胞肺癌においても、微小リンパ節転移は、広範囲に縦隔に分布しており、今後は、より正確な病期分類のためには、免疫組織化学的手技による微小リンパ節転移の有無を取り入れることも有用と考えられた。また、微小リンパ節転移陽性症例は陰性症例に比べて有意に予後不良であり、予後向上のためには微小リンパ節転移陽性例に対して選択的に術後補助療法を併用することも今後検討すべきと考えられた。

以上、本研究は、従来の方法では検出できない微小リンパ節転移の検出法を確立したものであり、肺癌治療の進歩に寄与する研究と評価された。